

# メガロポリス・エキュメノポリス・世界都市

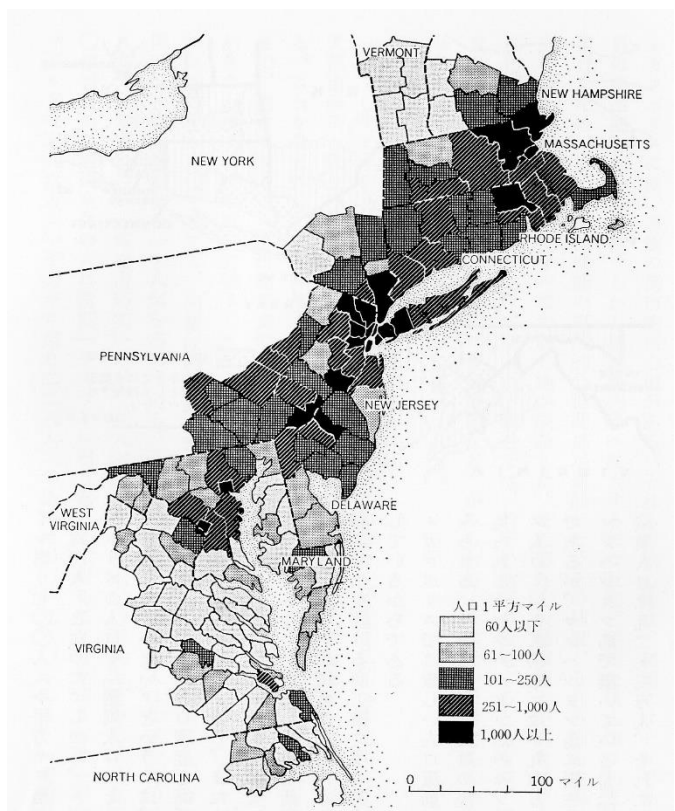
一般社団法人大都市政策研究機構  
 大都市政策研究班

1950～60年代における大都市の人口急増は、従来のメトロポリス（metropolis: 大都市）を超えて、大都市同士が接続・融合した「メガロポリス」の形成を生じるようになる。さらには地球規模の単一都市「エキュメノポリス」の構想も生まれる。1970～80年になると、企業の多国籍化とグローバル経済の進展により、新たに「世界都市」（ワールド・シティ、あるいはグローバル・シティ）の概念が生まれ、都市論において多く議論されるようになった。

## 1 メガロポリス

フランスの地理学者であるジャン・ゴットマン（Jean Gottmann, 1915-1994）は、アメリカ合衆国北東地区（Northeast）臨海部におけるボストンからニューヨーク、フィラデルフィア、ボルティモアを経てワシントン D.C に至る地域で、これらの大都市圏が人口増加に伴い、相互に接続、融合し、多核的構造（polynuclear structure）をもつ巨大な都市化地帯を形成している状況を見だし、これを古代ギリシャ文明の連合都市の名になぞらえて「メガロポリス」（megalopolis）と呼んだ。訳語として、「超巨大都市圏」、「巨帯都市」、「巨大都市連合」と称される。

ゴットマンは、その著書『メガロポリス』（Megalopolis: The Urbanized Northeastern Seaboard of the United States, 1961）で、アメリカ合衆国北東地区のメガロポリス形成の要因として、大西洋沿岸部の各州が互いに競争をして核心都市を完成させ、それらがついに結びつくまで発達するに至ったこと、さらにはこの臨海都市群が海外と内陸との交易を結びつけるアメリカ経済の要衝（hinge）としての役割を果たしてきたこと、の2点を挙げる。そしてメガロポリスの機能として、類例がないほどの大きな人口集中、主要な商工業機能の蓄積、ホワイトカラー化と国際金融機能による富と財政の集中、有力な大学、研究所、図書館、出版・新聞社などによる文化・芸術面での主導的地位といった特徴を明らかにした。一方で、都心部の衰退と郊外分散化によるスラム化や住宅問題、交通問題、近郊地帯の農業面における問題、行政区画や機関分割の問題、土地利用規制（ゾーニング制）の問題なども示し、この先駆的（pioneer）とも言えるアメリカのメガロポリス研究が、他の国々の加速度的な都市化地域において将来とるべき対策への有効な示唆を与えるだろう、と記している。



図：メガロポリスの人口密度

出所：J.ゴットマン著、木内信蔵、石水照雄共訳『メガロポリス（SD選書）』鹿島出版会、1967年

当初、「メガロポリス」は、このアメリカ合衆国北東地区臨海部のみでの呼び名であったが、やがて同様の巨大な都市化地帯——すなわち、①いくつかの巨大都市圏を包含する连接的・多核的な都市化地帯であって、②交通通信網によって密接に結ばれて機能的に一体化し、③人口と経済の集中によって国内経済の中核となり、④国際的な影響力をも発揮する地域を、一般的に「メガロポリス」と呼ぶようになった。

日本では、東京から名古屋、京阪神に至る東海道沿線の都市群を「東海道メガロポリス」と呼んでいる。

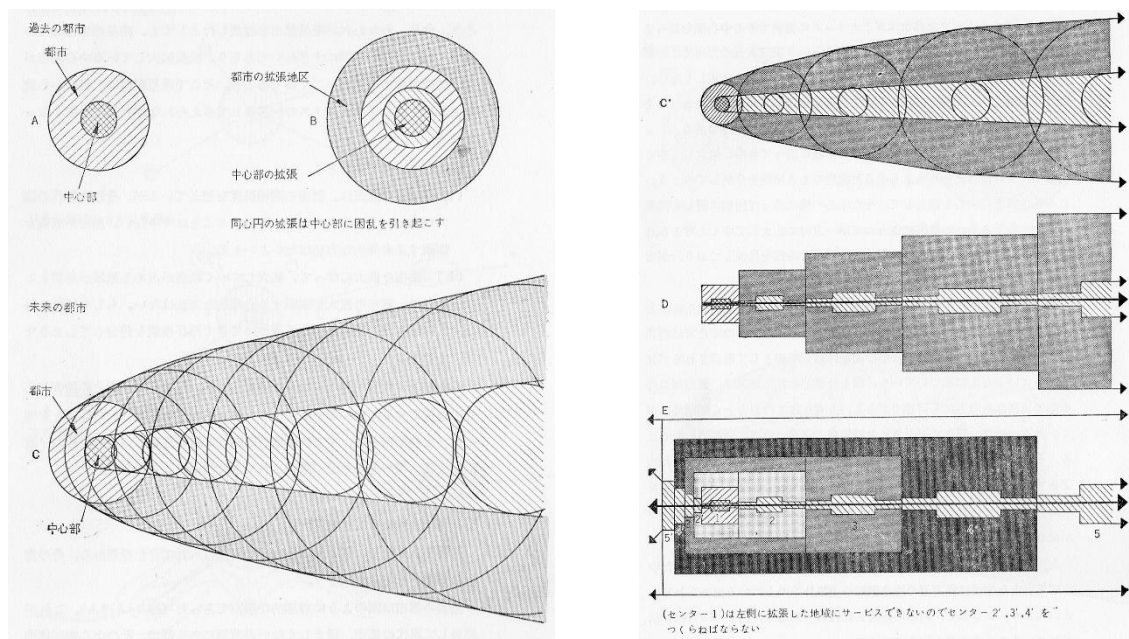
西ヨーロッパでは、人口や工業が集積し、経済が発展するイギリスのイングランド北部からフランス北東部、ドイツのルール工業地帯を経てイタリア北西部に至るバナナ型のエリアを「ブルーバナナ」（別名でホットバナナ）と称し、「ヨーロッパのメガロポリス（バックボーン）」とも呼ばれる。このエリアには、バーミンガム、ロンドン、アムステルダム、ブリュッセル、デュッセルドルフ、フランクフルト、ストラスブール、チューリッヒ、トリノ、ミラノなどが含まれる。

中国では、「長江デルタ」（上海・江蘇・浙江・安徽）、「珠江デルタ」（広東）、「京津冀」（北京・天津・河北）などでメガロポリスの形成が進んでいると言われ、とくに珠江河口の広州・香港・深圳・東莞・珠海・マカオを結ぶ三角地帯の「珠江デルタ」は有名である。

## 2 エキュメノポリス

ギリシャの建築家・都市学者であるコンスタンティノス A. ドクシアディス（Constantinos Apostolos Doxiadis, 1917-1975）は、人間の居住空間を科学的方法で解析するエキスティクス理論（Ekistics：人間居住科学）を打ち立て、そのなかで「エキュメノポリス」（Ecumenopolis：世界都市あるいは惑星都市。古代ギリシャ語のエキュメノ（人の住む世界）とポリス（都市）をつなぎ合わせた造語）の概念を提唱した。

世界中の爆発的な人口増加と都市への人口集中は、新たな人間居住空間の建設を要求しているが、静態的な性格をもつ「過去の都市」では、都市成長が中心部、住宅地域の破壊をもたらし正常な発展を阻害する。「未来の都市」は、動態的な性格をもち都市発展を可能とする「ダイナポリス」（Dynapolis：ダイナミックな都市の造語）を形成させ、都市中心部が軸に沿って自由に拡大し、①一方向への発展、②垂直軸体系上の発展、③垂直軸体系上及び六角形ハイウェイ・パターン状（最も経済的な構造）など、幾何学的な法則に従って発展段階をたどるべきとの独自の都市形態論を提案した。



図：都市の拡張（左）、ダイナポリス（右）

出所：C. A. ドクシアディス著 磯村英一訳『新しい都市の未来像－エキスティクス－』鹿島出版会、1965年

そして、世界の総人口が年平均 2%で増加すれば、21 世紀終わりには 200～250 億人に達し、食料供給のために農業居住社会は 17 億人、60 万 km<sup>2</sup>、都市居住社会は 180 億人以上、1500 万 km<sup>2</sup> を占めるだろうと推定し、こうした都市の成長によって、最終的にはメガロポリスから、地球上のすべての住民を含む地球規模の単一都市である「エキュメノポリス」に至ると予測した。

ドクシアディスは、エキスティックス理論において、エキュメノポリスを人間居住空間の単位の最上位階層として位置づけ、その進化は避けられないものであり、エキュメノポリスを人類にとって住みやすく快適な空間にする計画を立てなければならないと主張した。

また、1963 年から 1975 年までの 12 年間にわたり、世界を代表する学者、実務家、建築家、都市計画家などがギリシャに集まり、人口爆発に伴う世界各地の諸問題への解決や、地球上における人類の居住に関する問題を議論する「デロス会議」も主催し、その成果は「デロス宣言」としてまとめられている。

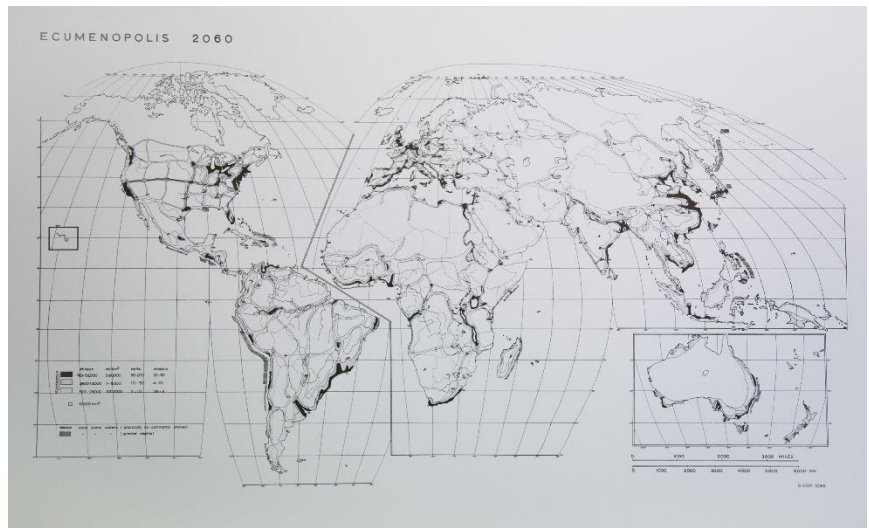


図 : Constantinos A. Doxiadis: Ecumenopolis (1967)

出所 : “Constantinos Doxiadis: The Greek visionary who built cities for the world”, Greek News Agenda, 21 February 2023

### 3 世界都市（ワールド・シティ、グローバル・シティ）

加茂（2005）によると、多国籍企業とグローバル・マネーの形成が本格化した 1970 年代、国際的な企業・法人本部とそれを支える活動のコンプレックス（複合体）を擁する都市を「世界都市」（World City）と定義し、こうした都市の育成をはかる議論がはじまった、とする。

ニューヨークの都市再生の可能性を検討するため、コロンビア大学の研究グループが行った調査研究において、ニューヨークの集積力は、製造業や卸売業では衰退しているものの、国際的な活動をしている法人本社部門とその活動を支える金融、保険、通信、証券、不動産、法務、会計、広告、コンサルティングなどの高次法人サービス、それにレストラン、出版・印刷、専門店、ファッション、ホテル、観光、教育、芸術などの補助サービスなどの集積はむしろ強まっており、このニューヨークの経済的地位を「世界都市」という言葉で表現した。

「世界都市」の概念は、「グローバル経済の司令部」としての機能を基準に定義され、多国籍企業時代における国際管理中枢機能複合体の集積の強化を都市再生戦略の基軸とする政策がニューヨーク市によって先鞭をつけられる。やがてロンドンや東京の都市政策に伝播して「世界都市・東京」、「ロンドン世界都市」政策を生み出し、1980 年代には「三大世界都市」の構図が描かれるようになった。

カリフォルニア大学教授のジョン・フリードマン（John Friedmann, 1926-2017）は、『世界都市仮説』（The World City Hypothesis, 1986）において、世界都市の定義を多国籍企業体本社の集積から次のように説明する。

- ① 資本主義の世界システムの中で、法人の拠点、金融センター、グローバル・システムや地域・国民経済の結節点として、その機能を果たす都市
- ② 多国籍企業がその基地として立地し利用するため、複雑な国際的・空間的ハイラーキー（階統秩序）の中に位置

## づけられる都市

- ③ グローバルな管理機能の集積を反映して、法人の中枢部門、国際的な金融・輸送・通信・広告・保険・法務などの高次ビジネス・サービスなどが成長する都市

一方、コロンビア大学教授のサスキア・サッセン (Saskia Sassen, 1947-) は、その著書『グローバル・シティーニューヨーク・ロンドン・東京』(The Global City: New York, London, Tokyo, 1991) において、「グローバル・シティ」という表現を用いて、国際金融センターあるいは高次サービス機能を中心に世界都市を理解しようとした(その後、1990年代の情勢を受けて2001年に第2版が刊行されている)。

サッセンは、「経済活動の地理的な分散とグローバルな統合が同時に起きた結果、大都市は新しい戦略的な役割を担うようになった」とし、これまでの国際貿易・銀行業の中心としての役割に加え、①世界経済を組み立てるうえでの司令塔が密集する場、②製造業にかわって経済の中心となった金融セクターと専門サービス・セクターにとっての重要な場、③金融や専門サービスという主導産業における生産(イノベーションの創造も含む)の場、④生み出された製品とイノベーションが売買される市場、という4つの機能が備わった新しいタイプの都市を「グローバル・シティ」(Global City)と定義し、その代表例として、ニューヨーク・ロンドン・東京・フランクフルト・パリを挙げた。

著書では、ニューヨーク・ロンドン・東京に注目して、分散と統合の二重性に基づく経済成長がグローバル・シティの経済秩序に与える影響、経済活動の国際化が都市システムに与える影響、国民国家とグローバル・シティの関係について分析するとともに、これらグローバル・シティにおいて経済的な二極化(高賃金労働と低賃金労働の二極化)が進行していることも指摘している。

グローバル化という時代が創り出した資本主義空間を意味する「グローバル・シティ」の概念は、現在とくに都市論で多く用いられるようになっている。

(一般社団法人大都市政策研究機構 主任研究員 三宅 博史)

### <参考文献>

- J.ゴットマン著、木内信蔵、石水照雄共訳『メガロポリス (SD 選書)』鹿島出版会、1967年  
谷岡武雄「メガロポリスの提唱者、ジャン・ゴットマンの生涯と業績」『立命館地理学』第20号、2008年  
C. A. ドクシアディス著 磯村英一訳『新しい都市の未来像－エキスティックスー』鹿島出版会、1965年  
Constantinos A, Doxiadis, “ECUMENOPOLIS: Tomorrow’s City”, BRITANICA Book of the year 1968, Encyclopedia Britannica, Inc.  
「人間環境を考える--C.A.ドクシアディス追悼号<特集>」『SD : Space design: スペースデザイン』No.143, 1976年7月号  
加茂利男『世界都市－「都市再生」の時代の中で』有斐閣、2005年  
サスキア・サッセン著、伊豫谷登士翁監訳、大井由紀、高橋華生子訳『グローバル・シティ : ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』筑摩書房、2008年



The Global City: New York, London, Tokyo  
(Princeton University Press, 1991)